

そのとびらを開けてみる会

そのとび

SONOTOBI

2024年度 活動報告

はじめに

趣味も年齢も出身地も違うわたしたちがたまたま
出会い、語り合う中でこの場が生まれました。

コンクリートの生活の中では出会えなかった命。
都会では感じとれなかった人とのふれあい。

会話の中で出会った黒羽蜻蛉をヒントに
「どらごんふらい」というグループがうまれました。

わたしたちはここであらたな仲間とともに
少しだけ扉に向き合ってみようかなと
思ったり、思わなかったり。



どらごんふらい

そのとびらを開けてみる会

そのとび

あなたの「生きづらさ」を みんなと考える

自分の見方をちょっと変えてみると少し楽になった。
そんな経験をした僕たちと一緒に未来を考えませんか？
一度、わたしたちとその生きづらさに、触れてみましょう。
それは「壁」じゃなくて「とびら」かもしれません。

日時：第2火曜日 13:00-16:00

場所：王寺町やわらぎ会館3階和室

内容：ゆる〜く座談会、時々外出企画

主催：王寺町、地域活動支援センターいちにの（NPO 法人なないろサーカス団）

いっしょに踏み出す
いちにの、さん!!

地域活動支援センター

いちにの
ichinino

問い合わせ：

080-4495-0012

（地域活動支援センターいちにの）



Photo by Yaya

ややさんの物語

前回外に出たのがいつで、なんの用事だったのか。思い出せないほど外に出ることがないのに罹ってしまった溶連菌と一ヶ月近く闘い薬の副作用に負け、ぐったりと居間に寝転び庭の空を仰いでいた。空が見えるって最高に贅沢だ。幸せだ。

ふと、蝶のように舞う黒く大きなトンボがいてまぼろしかと疑った。それはきちんと存在していて、それはハグロトンボだった。神様トンボだった。庭先で小一時間ほど甘美な羽ばたきを繰り返して、飛び立っていった。

「十八歳まで野生のカタツムリを見たことがなかった」

と言うとよく驚かれるけれど、これは私が虫を探すのが特別下手ということでもなく、いないものはいない。転がせる石は転がしたし、掘れる土は掘ったし、漁れる落ち葉は漁り尽くした。「梅田から越してきました」と聞けば殆どの人が納得することでしょう。

「十八歳まで野生のカタツムリを見たことがなかった」

それなのに奈良に越して雨の日の夜、川のそばを散歩すれば避けるのに苦勞するほどのカタツムリがいた。全身がじわじわと痺れて体幹をうまく保てず、ゆっくり歩くのがやっとだった。とてもスタスタとは歩けない。これを放心と言うのだと思う。すれ違ったうんざり顔でランニングする高校生とは真逆、一人でにやけてしまいそうで涙が出るほどうれしかった。時間を忘れて屈みこんだ。ちょっかいを出す彼らの目（ツノ？）は本当に縮んだし、ナメクジとカタツムリは殻以外も結構違った。「カタツムリめっちゃおる！」ってきつと誰でも知ってることを誰かに話したかった。

蟬といえば「ミーンミンツミンツミンツミー」でお馴染みミンミンゼミは大阪市には統計上殆んどおらず、實際公園ではクマゼミばかりシャンシャンと鳴いている。年に一度キャンプへ行く、そこで初めてヒグラシの死骸を見た時は小さすぎて作り物かと疑った。そこでしか聴いたことのなかったヒグラシもツクツクボウシもミンミンゼミも昨夏は家にいて当たり前に聴こえるのに驚いた。

ツクツクボウシは鳴き終わりに「モウイイヨーモウイイヨーモウイイヨージー……」と鳴くのが可愛らしい。けれど鳴き声を調べても活字では「ツクツクボーシ」と表記されているものばかりで、母は「言われてみれば」と。次の夏が訪れたら最後まで鳴き声を聴いてくださいますか。

「カタツムリ」「カエル」「カマキリ」。絵本やこくごで当たり前に知れる生き物を、思い返せば（記憶上、旅先以外で）どれも野生の実物を見たことはなく、私にとっては都市伝説も同様だった。

トンボは見たことがある。掠れた橙色のトンボが、むせるほどの塩素が溶かされた屋上のプールで毎年懸命に産卵をしていて、夏の体育の授業がはじまるたび準備運動をしながら「こんな場所を選ばせてしまってごめんなさい」と、陽光きらめくプールの水面への興奮と乖離した部分の私が鬱々しく思っていた。その場所以外でトンボを見たことはなかった。排水の詰まった公園の手洗い場では同じくいずれ意味のなくなるボウフラが生きようとしていた。

幼かった私が知っている限りの近所で一番虫がいる場所といえば小学校の鳥小

屋の周辺に敷かれた人工芝のうち唯一捲れる一区画で、アリとナメクジ、ダンゴムシ、キセル貝などがいた。先生の目を盗んでも見ていた。

都会での直接的な虫との交流といえばそれと、弱い弱い蚊との陰湿な戦い、ぴょんぴょん跳ねる色素の薄いゴマみたいな蜘蛛、飲み屋街のゴキブリとハエ、コバエ、雨の前後の公園に霧のように群れて飛ぶ虫、春秋に探せばケムシ、時々現れるカメムシ。それと、なんばの爬虫類カフェで昆虫食としてコオロギやバッタ、オケラなどの盛り合わせを口にしたくらいだったと思う、これは刺激の溢れる都会に生まれてよかったことの一つ。

こちらに越してきてよかったことの一つは見知った虫や草花がみんな一回り大きくて、まるでおとぎの国にいる気分になれること。都会の強い味方だったダンゴムシはこちらでは二回りは大きく、夏の人と同じように日陰を選ぶように地上を歩いていることがあって坂道を誰よりも早く転がっていく。

あんなにみんなのアイドルだったという虫は草むらに屈めば目が慣れた途端、初めて毒々しく恐ろしいと感じ腰を抜かすほど沢山いた。色の濃さを比べられるほ

どのモンキチョウが色とりどりの花の蜜を求めて仲睦まじく飛び交っている土手はまるで楽園。

誰もが焦がれるヒーローのように真っ赤なトンボが、透き通った雫のように青いトンボが、収穫前のやさしい稲の香りのする田んぼには夢にも見れないほど飛んでいて、位置を確認するようにしながら飛ぶ特徴的な飛び方を知った。

蚊も比にならぬほど大きくて、刺された瞬間ちゃんと痛かった。殴られたような痕ができた。それさえもうれしかった。「まだ痛い、まだかゆい、まだ熱を持っている」と毎日文句を言っただけでも、それさえもが泣けるほどうれしかった。全ての体験が愛おしかった。覚めない夢のようだった。

雨の音が聴こえる。目の前にそびえ建つビルで晴れの日でも暗い家、その隣を夜中もひっきりなしに走る車が水を跳ねる音。ではなく、しとしとと雨が地を打ち葉が雫を落とす音。カエルが鳴いている。童謡で歌った秋の虫が、身の危険を感じるほど大きな蜂が、美しく歌う鳥が、探さずとも見えずとも近くにいます。聴こえる。

ミミズ、ムカデ、アシダカゲモ、あのサイケデリックな腹を持つのはジョロウグモ。入手当時は対して役に立つことのなかったゲームソフト（3DS）「花といきもの立体図鑑」に八年越しに活躍してもらうことになると思っていなかった。

昨夏田んぼの用水路に浸かり網と虫籠を持った少年らは一体何を探していたのだろう。教えてはなかった。私の知らないことを彼らはいったいどれほど知っているのだろう。少しずつ脳裏に焼き付けていく。今までもとも知らずにがらんどうだった部分を埋めていく。必死だ。字とは裏腹に必死になるほど潤っていく。豊かになっていく。生い茂る場所がある。感覚がある。

今、服や歳や身体をも忘れて、小さな虫や花一つに地に這いつくばってでも夢中になれること。ある意味では枯渇していた都会で生まれ育ってよかったことの一つだと思っている。

最後はいつまでも何もしない僕に愛想を尽かしサヨナラを告げられましたが、特に心の病になってから誰よりも僕のことを考えてくれたことには感謝してます。

自分は恵まれた家庭環境で敷かれたレールに乗って生きてきたらしいのに脱線しまくって、本当にダメダメな墮落人生です。45歳にもなって親不孝街道爆走中。

その後はもぬけの殻のように何も出来事がなさ過ぎて10～15年間の記憶がありません。記憶喪失ではないですが、何もしてなかったし、何もなさ過ぎました。あるとすれば、自殺未遂を2回したことですね。人は簡単に死ねないのだと勉強になりました。その結果、双極性障害と診断され障害者年金をいただけるようになりました。

自分では引きこもりだったけど、今は用事や観たい映画などがあれば出かけられるから引きこもりではないのかと思う時もありますが、世間の常識から考えるとやっぱり引きこもりなんでしょう。

去年から月1回ではありますが、そのとびに参加して話す相手もできてありがたく思っています。

基本的にあれはどうだったとか聞いてもらえれば、自分の経験談はオープンに話しますので聞いてください。

竹田くんの人生

大学在校中に両親が土地を借りて畑をしていたのですが、同じく隣で畑をしていた方から銀行でのアルバイトを紹介され3年間勤め、そこで元嫁と出会い4～5年くらい交際後、デキ婚ではないですが僕の望まぬ形で結婚しました。

というのも父が大阪府警で練習のつもりで受験してみろと言うので受けた警察学校に（たぶん）コネで受かってしまい、鬼教官や規則に耐えられずすぐ辞めてしまい、親の期待を裏切ったという自責の念で睡眠障害や気持ちの落ち込みや自殺念慮になり、元嫁も心配してくれてどうしたらいいかということで心療内科に連れて行かれ鬱と診断されました。

その後も気持ちが晴れることはなかったのですが、元嫁のお母さんが新聞の求人広告から切り抜いてきた営業職に就くも半年でギブアップ。

その次は元嫁が勤めていた大学の就職課の上司の紹介で事務職に就くも、取引先とのトラブルが続いたこともありなんとか乗り越えましたが、乗り越えた先にあったのは緊張の糸が切れて、勤め先の1つ前の難波駅から進めなくなり駄目になりました。

自分では最後の事務職は楽しかったし、病気のことも事務所全員の理解もあり良い職場だっただけに残念です。